

詩的考察：今ここにある禍

高野吾朗

足跡

この世のどこか片隅に なにもしゃべらぬ絵描きがいる
古ぼけた小屋の片隅で 今日も彼は自画像を描いている
それはどれも掌に乗るサイズの絵で 黒い帽子に黒い服
表情はひどくぼやけていて 幕の上がった舞台になぜか
ただ立ち尽くしている彼自身の姿だ そんな絵ばかりが

何百も 床に散らばっている小屋の小窓から 絵描きは
再び うっすら雪の積もった路面を見つめる そこには
今日も誰かの足跡がある 誰のものだろう 彼は今日も
半人半馬の幼女の天使を想像する バレエのダンサーの
ように舞い踊りながら 天使が歌う 「なぜ人は不変を

夢見るのか なぜ 変化を禁ずるものに怒れないのか
天使の君こそが まず率先して怒るべきではないのか？
そう言いたくなる心を抑え 先ほど描き始めたばかりの
自画像の体を 彼が黒く塗り始めると ぼやけたままの
その顔から 「わたしには声にならない悲しみがある」

という声が漏れる　すると　床いっぱいには散らばる他の
自画像たちからも　「わたしもだ！」という声があがる
集中力を乱された絵描きが　再び窓の外の路面を見ると
歴史から消えた者の残り香のごとき　新たな足跡がある
これは半人半牛の若い女の天使だと　絵描きは想像する

恋愛中のような顔でその天使が嘆く　「虐げられている
者たちはなぜあんなにも黙っているのか　どうして誰も
怒りを相手にぶつけないのか」　天使の君こそが　まず
率先して怒るべきではないのか？　と言いたくなる心を
再び抑えて　ちょうどいま　帽子を黒く塗ったばかりの

自画像を　絵描きが見つめ直すと　曖昧な容貌から再び
声がする　「声にならない悲しみというやつは　悲しむ
本人からすると抜け出して　ある日突然　幽霊の姿で
本人を感わせに来ると言うが　わたしの悲しみは　まだ
一度も　幽霊の姿で　わたしを感わせに来たことがない

一体どうしてだ」　すると再び床から「わたしもだ！」
という声が一斉にあがる　その哀れさから逃れるように
絵描きが再び外を見ると　蹄のような足跡が　彼のいる
小屋の方へ向かって少しずつ増えている　もしやこれは
一角獣のものかも　そう彼は想像してみる　柔和な顔で

純白の獣が美しく嘶く　「この街の動物たちはどうして
人間たちに飼われ　好き勝手に扱われ　時に犠牲になり

そして最後は 人間のやり方で葬られていくのか なぜ
もっと怒らないのか」 一角獣の君こそがまず率先して
怒るべきではないのか？ 思わずそう言いそうになった

絵描きの掌の上で 完成間近の自画像がまた嘆き始める
「わたしには 声にならない悲しみがある それなのに
わたしを創り出そうとしているこの男にだけは なぜか
この悲しみがちゃんと憑依してくれないのだ なぜだ」
再び床一面から「わたしもそうだ！」の大合唱が起こる

窓をこつこつと叩く音に驚き 絵描きがそちらを見ると
老いた女の天使が 真冬にもかかわらず 砂漠の女王の
ごとき半裸のいでたちで 彼に何かささやきかけている
窓に遮られてよく聞こえないが 「早く私を抱きしめて
ほしい」と訴えている様子だ 絵描きが初めて声を出す

「自分を殺した者に もはや怒れない死者たちのことを
冷笑している君は間違っている 君こそがまず怒れ！」

窓を叩き続ける天使の両目には 預言者の首を欲しがる
遙か昔のかの踊子の色香が浮かぶ その手には一角獣の
角のごとき鋭利な何かが光る 「一度だけ抱いて下さい
でも子供は作りません 世界が真に平和になるまでは」
小屋の壁という壁を飾るのは 彼女を描いた無数の絵だ

出勤風景

老いぼれ詩人と二人暮らしのあなた 今朝もまた
一心不乱に詩を書いている詩人の背に「それでは
行ってきます」と明るく告げると 羽根を広げる

出勤の途端 あなたはもはや人ではなくオウムだ
新築が立ち並ぶ一本道の東端に位置する自宅から
あなたはその道を飛ばずに歩いて 職場へと急ぐ

あなたの羽毛の色は 昨日までの白ではなく金だ
けれども鶏冠は いつもと同じく 派手な王冠だ
街の動物園のあの檻で 今日閉園まで客相手だ

一本道の西端の家から いつものように鍬を持ち
例の男が道に出てくる 百歳をすでに越えた彼は
コンクリートしかないこの街で 自称「農夫」だ

「こんな時代なので辛いとみんな言うが こんな
時代だからこそ救われる人もいます そんな
人の声も聴かないと」 農夫のいつもの独り言だ

颯爽と西へ歩むあなた とぼとぼと東へ歩む農夫
あなたの介護にすがって生きている詩人の口癖を
オウムのあなたは 今日 鼻歌のように真似る

「音律ノナイ詩ハ駄作ダ」「現実的ナ詩ハ愚カダ」
「詩ニ客観性ハ要ラナイ」「見エヌモノヲ夢想スル
感情 ソレガ詩ダ」「意味ヤ知性ヤ科学ハ不要ダ」

農夫はいつものように 新築の家を一軒一軒訪ね
アスファルトしかない庭を眺めては 「この土は
畑に最適です お忙しいなら私がお宅の代わりに

無償で耕して差し上げます」と インターホンに
優しく話しかけるが 応答する家は今日も皆無だ
錆びた鍬が 農夫の足元で鈍い金属音を繰り返す

その昔 この道の裏の用水路で 幼児が溺れた時
あまりの汚水の深さに怖気づく大人たちを尻目に
暗黒へと飛び込み 幼児を救ったのは農夫だった

汚れた紙幣を無邪気に握りしめる幼児を見かけて
「金に付いた黴菌に感染して死ぬのも地獄 金を
捨てて貧乏で死ぬのも地獄」と言ったのも農夫だ

東へと歩む農夫とすれ違う瞬間も 詩人を真似る
あなたの嘴は 止まる気配がない 「コノ宇宙ニ
翻訳不可能ナモノハナイ」「真善美ハ獲得可能ダ」

「神モ仏モタダノ形骸ダ！ソナ神仏ヨリモ今ハ

詩ダ！詩ノ定型コソガ真ノ宗教ダ！」 けれども
詩人がつい先ほど 書き上げたばかりの詩の中に

並んでいるのは あなたが真似る言葉とはなぜか
まるで正反対な文言ばかりだ 一息ついた詩人の
家のインターホンに 農夫の優しい声が響き渡る

「今日も詩作ですか 世の中の全てが詩になると
おっしゃっていましたが 詩にならぬものだって
あるのではないですか お書きになる詩はどれも

不気味に終わるそうですが めでたしめでたしで
素直に終わるのは そんなにいけないことですか
お宅の畑 私が無償で耕して差し上げましょうか」

誰にも相手にされぬこの農夫が 命の次に大事に
しているのは 一緒に戦争を生き抜いたあの鍬だ
農夫が自宅に戻るところ あなたの王冠は檻の中だ

密の味

あなたとわたしは もはや体を触れ合うことを許されていない
触れ合えば お互いの肉体を破壊するどころか 社会に大きな
混乱を招きかねないと 権力者たちが一斉に禁じてきたからだ

そこで二人は 長らく「役に立たぬ」と言われ続けてきた力を
用いて 二人にしかできぬ秘密の密接行為を始めることにした
まず わたしの頭頂から どこにも実在しない一本の 巨樹が

伸び 緑の若葉を思い切り繁らせて 大地に大きな影をつくる
すると あなたの背中が縦に割れ そこから 毛がふさふさの
愛くるしい顔をした四足の獣が現れ のそのそと巨樹に近寄る

獣と巨樹の他には誰もおらぬ 水を飲む習性も汗をかく習慣も
ない この獣の唯一の食べ物は 猛毒を持つこの巨樹の若葉だ
幹にしがみつき 枝から枝へと這い 毒まみれの葉を食う獣の

おかげで 巨樹はみるみる丸裸にされていく わたしにはその
姿こそが わたしだけの真実の言葉のごとく見えるのだ 一方
毒まみれになった獣は 消化のため そして体温を下げるため

死者のごとく冷たい巨樹の幹を 懸命に抱えたまま 半永久の
眠りにつく 食べる葉はここにはもう一枚もなく 他に頼れる
樹木はもはやどこにもなく あなたの体へ戻る術もないままに

あなたとわたしは もはや体を触れ合うことを許されていない
接触せぬままなら もはや生きていたとは言えないはずなのに
直に触れ合ってなくても 結局は間接的に触れ合っているのに

今度はわたしの中の誰かと あなたの中の誰かが呼び出されて
くじを引けと命じられる 全ての国民が引かされているくじだ
国家滅亡を回避するための生贄と その生贄を殺す者の二人が

これで決まる わたしたちが選ばれたのは本当に偶然のせいか
それとも嫉妬ゆえの陰謀のせいか 差別ゆえの不公平のせいか
今回はわたしがあなたを殺すが 次回はきっと役割が逆だろう

儀式のクライマックスを見守る群衆を背にしながら あなたの
首に手をかけると この不条理が二人を驚くほど冷静にさせる
この絶望まみれの連帯に もはやヒロイズムなど全く必要ない

誰にも責任をなすりつけることなく ただあなただけを見つめ
両手に力を込めると 背後の群衆は もはやどこかに消え去り
二人だけの歓びが 空間を垂直に分かち 同時に 水平に覆う

あなたとわたしは もはや体を触れ合うことを許されていない
わたしたちの接触を許さない人たちは きっと 自らの不安が
収まるやいなや わたしたちのことなど 忘れてしまおうだろう

二人の秘密の行為はなおも続く 若々しく潑刺としたあなたと

わたしは スポットライトを一身に浴びつつ ダンスフロアの
中央に立つ チャビー・チェッカーの歌うLet's Twist Again が

大音響で流れはじめると 二人は軽やかにツイストを踊りだす
「去年の夏のようにまた踊ろう 回って回ってアップ ダウン
さあ もう一度」 体をくねらせながら 互いに近づくたびに

二人の間の遠さが身に染みる 両手を左右に激しく振りながら
離れ合うたびに 二人の間の近さがまざまざと痛感されていく
汗まみれの自分のこの姿を 夢の中で じっと眺めているのは

昏睡状態で横たわる 老いさらばえた 骸骨のごときわたしだ
そしてそのすぐ隣では 老いさらばえた骸骨のごときあなたが
同じく昏睡状態のまま わたしの手をぎゅっと握っているのだ

あなたとわたしは もはや体を触れ合うことを許されていない
それでも別に構わない 二人のこの秘密の行為に 終わりなど
全くないし たとえ全てが幻でも もう十分 幸せなのだから